

地域住民が地域福祉アンテナショップを自分の居場所にするプロセス

○ 武蔵野大学 高橋 美季 (010506)

居場所、地域福祉、M-GTA

1. 研究目的

日本には現在、高齢化や人口減少、1人暮らしの増加、つながりの希薄化といった課題がある。人と人、人と社会がつながり支え合う取組が生まれやすいような環境を整える新たなアプローチが求められているこのような現状を踏まえ、厚生労働省は、「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」である、地域共生社会の実現を目指している。

また、地域では見守り機能の低下と、気軽に集える場所の不足が地域の中で起きていることに気がついた。

課題の解決のためには、居場所づくりの取組みが一助になると考えられる。本研究では、「居場所」が複雑化・複合化した課題がある日本における課題解決への有効な手段であり、地域共生社会への一助となるとの考え方の関連から、地域住民にとっての「居場所」とは何かを検討した結果、園田(2012)の定義をもとに、「自分が守られている、必要とされていると感じる、地域において自分の存在意義を確認できる空間」を「居場所」として定義する。

現在、A市の地域福祉計画と地域福祉活動計画の両計画では、「地域福祉アンテナショップ」を、市内に複数箇所設立することを重点推進事項としている。地域福祉アンテナショップの取組みは、本研究の場所の定義と一致している。しかし、地域福祉アンテナショップに関わってここを居場所にできた人たちは、どのようなプロセスで地域福祉アンテナショップを自分の居場所にすることができたのか、そのプロセスは明らかになっていない。そのプロセスを明らかにすることによって、地域住民がより良く居場所を作るためのアプローチを検討することができる。そこで、本研究では、地域住民が地域福祉アンテナショップを自分の居場所にする

2. 研究の視点および方法

地域福祉アンテナショップに関わりを持って居場所を作ることができたと考える人を対象に、地域住民が地域福祉アンテナショップを自分の居場所にするプロセスとしてインタビュー調査を実施し、収集したテキストデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対して、依頼文を用いて文書と口頭にて調査の趣旨について説明し、同意書への署名を得たうえで調査を実施した。

なお、本研究は、武蔵野大学通信教育部研究倫理審査委員会の承認(受付番号 23-07-02)を受け、2024 年 1 月～同年 6 月の期間で実施した。

本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

得られたデータを分析した結果、18 概念と 5 カテゴリーが得られた。「はじまり」については、概念は「やらない?」「家より外」「自発的きっかけづくり」となり、「導入」については、概念は「ここでのできる」「誰かがいる」「外でも挨拶」となり、「関係性の構築」については、概念は「大事なおしゃべり」「気楽な関係」となり、「活動」については、概念は「週に一回は行くべき場所」「積み重ねでできた絆」「運営が居場所」「日々の積み重ね」となり、「関係性の深化」については、概念は「ふれあいから絆」「つながりの広がり」「気持ちのおすそ分け」となった。また、コアカテゴリーとして「受け入れられる感覚」「孤独・孤立解消する場所」「自分の場所」を抽出した。

5. 考察

地域福祉アンテナショップが居場所としての機能を持っているといえ、運営にあたってのルールが、地域住民が地域福祉アンテナショップを居場所にするプロセスを促進することに貢献していたといえる。

今後、より多くの地域住民が、地域福祉アンテナショップのような既存の場を自身の居場所にしていくプロセスをより促進していくために、本研究の結果をもとにいくつかのアプローチが検討できる。

第一に、結果図の【はじまり】との関係で、一般的な広報による周知だけではなく、居場所につながっていない人たちに〈やらない?〉と声をかけていくことである。

第二に、結果図の【導入】との関係で、地域福祉アンテナショップに何らかの形でかわりを持ってくれた人へ、〈ここでのできる〉ことが自分にもあるのだという風に思ってもらえるよう、思い込みを取り除くような声掛けを意図的に行っていくことである。

第三に、結果図の【関係性の構築】との関係で、〈大事なおしゃべり〉が展開され、地域福祉アンテナショップの中で〈気楽な関係〉が構築されるようにするために、あいさつとともに季節の移ろいの話をしたり、おしゃべりを望まない利用者に対しては、無理強いをせず自然に過ごしてもらえるように関わったりすることである。

キャスト(ボランティア)の多様性を高め、これらのことを意図的に行っていくことにより、地域住民が地域福祉アンテナショップを居場所にするプロセスが促進されるといえる。